

赤野井湾における真珠母貝生産の拠点化に向けた実証試験

佐野聡哉・井戸本純一

1. 目的

本県における淡水真珠養殖業の再興のためには、真珠母貝の増産が必要である。加えて、母貝生産の拠点となる水域は、水質等の環境変化による生産不振に備えて、多数存在することが好ましい。そこで、近年漁場環境が改善している赤野井湾において、実証試験として事業規模での母貝生産を行い、真珠母貝生産拠点としての評価を行った。

2. 方法

2020年10月に赤野井湾内の2か所の真珠養殖漁場（図1）にそれぞれ2,000個の稚貝を垂下した。各漁場に垂下した稚貝から無作為に抽出した各100個体について、2021年の3月と11月、2022年3月に生残と成長の推移を調べた。生残は、1個体ずつ目視で生死を確認し、死殻がなく行方不明になった個体については死亡したものとして取り扱った。成長は稚貝を並べて写真撮影し、パソコン上で画像データを基に殻長を測定した。

3. 結果

2022年3月時点の生残率は8号が88%、10号が99%であり（図2）、死亡によるロスは少なかった。

垂下時に14.1mmだった平均殻長は、17か月後の2022年3月には8号が75.3mm、10号が71.0mmまで成長した（図3、4）。前年の同試験の結果は8号97mm、10号92mmであり、この値と比較すると劣るものの、問題のない成長であると言える。

この結果から、赤野井湾は真珠母貝生産の拠点として有望であると考えられる。

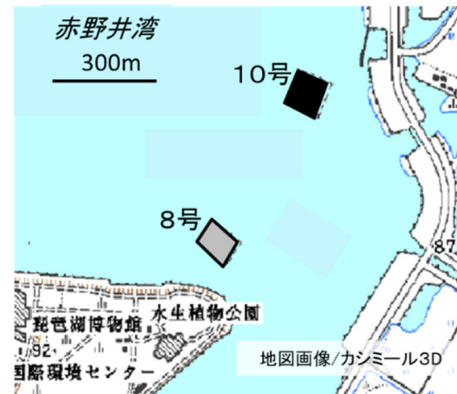


図1 実証試験を行った漁場（8号、10号）

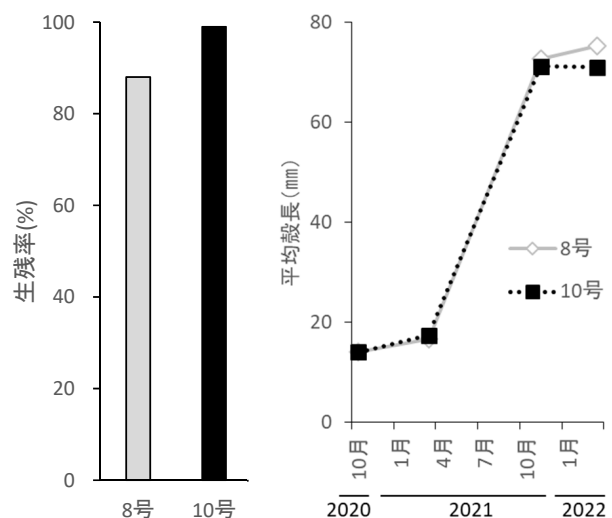


図2 両漁場における生残率（2022年3月）

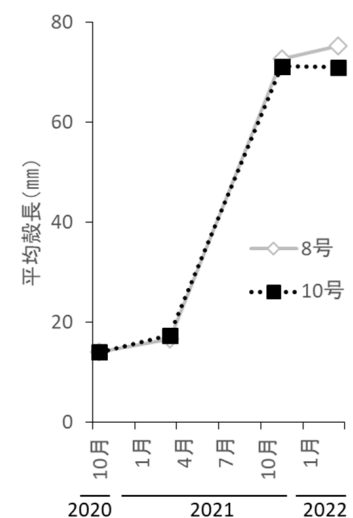


図3 両漁場における平均殻長の推移



図4 2022年3月（垂下開始から17か月後の母貝（8号漁場））